

## 平山清次博士

山本一清

一九四三年四月八日に平山清次博士が亡くなられた由を、その二、三日後、旅中に聞いて、自分は驚ろき、かつ落胆した。それはちょうどその半年前から、改暦問題について、自分は同氏と論戦していたので、ことにこの論戦は、何れが勝ちか負けか、世間に発表して、識者の判断を待つことにしようと、約束しつつ、論を進めていたからであった。近年同氏が病氣勝ちであることは、直接間接に聞いていたが、急逝せられたのは意外で、驚きもし、また、論争の相手がなくなったので、一抹の淋しさを感じた。

氏は明治七年（一八七四年）宮城県に生れ、二高を経て、明治三〇年（一八九七年）東京帝国大学天文学科を卒業され、以後、ほとんど引続きいて東京天文台の職員であり、大正八年（一九一九年）に教授となり、昭和一〇年（一九三五年）退官された。また、大正一四年（一九二五年）以来は帝国学士院会員であった。

博士はもともと寺尾寿博士ひさしの高弟であって、数理天文学——殊に天体力学の専攻者であったが、しかし若い頃麻布の天文台でいろんな方面の仕事をせられたらしく、明治三四年（一九〇一年）には南洋スマトラ島（パダン市）の皆既日蝕観測隊の一員として出張され、また麻布では口径七センチの天頂儀をもって緯度変化を観測されたこともあり、明治三九（一九〇六年）～四〇年（一九〇七年）には日露国境確定のため樺太へ出張された。これらの実地観測に関連して、明治四〇年（一九〇七年）には二四六個の恒星の赤緯と固有運動のカタログ

を発表し、また、明治四〇〔一九〇七年〕〜四二年〔一九〇九年〕頃には、国際緯度観測の結果に関する統計的な研究をナハリヒテン誌上に二、三回発表された。それから、明治四三年〔一九一〇年〕にハレー彗星が帰来したのに因<sup>ちな</sup>んで、同星の日本記録を調査されたり、日蝕や獅子座流星の東洋の古記録を調査されたりしたこともあるが、しかしこれ等はいわば余暇の仕事であつて、当時の博士の本職は大神宮の暦を計算作製されることであつた。そして、これに関連して、古今東西の暦学をかなり広く研究され、シナとギリシャ暦の問題や、日本の時刻法、各地の日月出入計算法等を発表され、また、改暦問題については、明治以来、晩年に至るまで関心をもつておられた。

上述の如く多方面の雑然たる研究題目から劃然<sup>かくぜん</sup>として唯一の問題に没頭されたのは、大正五年〔一九一六年〕に米国へ遊学され、イエール大学のブラウン教授の下において小遊星の研究を始められて以来のことである。周知の如く、ブラウンは『月の運動理論』の世界最高の権威者であつたが、同氏の示唆により、平山氏は小遊星の秤動問題を研究し、大正七年〔一九一八年〕帰朝後も永くこの問題の研究を続け、ついに小遊星の『族』を多く発見された。これ等の研究に関する氏の論文は大正六年〔一九一七年〕頃から昭和二年〔一九三七年〕頃まで、東京帝大理科紀要、数学物理学会記事、天文輯報、学士院記事等に発表され、これ等が氏の一生涯の最も輝やかしい部分を占めている。従つて、氏と小遊星とは深い宿縁につながれ、ベルリンの計算局のために年々の小遊星の位置推算を助力せられた。

氏の生存中、すなわち最近六〜七〇年にわたつて、学界は新旧天文学の交錯はなほだしい時代であつたが、氏はどこまでも寺尾学のイデオロギーを固守し、華々しい天体物理学には手を出さなかつた。ただし、昭和六〔一九三一年〕〜七年〔一九三二年〕の頃、週期変〔光〕星の問題について、純力学的な論理を進め、大した意

気込みをもって、わざわざ京都までそれを説きにこられたことがあつたが、この論はその後振わなかつた。

氏は熱心なクリスチャンで、マジメな性格のもち主であり、いかにも狭い意味の学者的な、常識を逸した傾向も時々表われたが、しかし表裏のない、きわめて純真な性格は、東京には珍らしい型の人であつた。かのメートル法に反対して、尺貫法を主張したり、夏時法を主唱したりして、他人の説を聴こうとしない偏喬へんきょうさはいちじるしかつた。氏がメートル法に反対したるがため、わが国内の理学文化の發達をどれだけ妨げたかは、測り知れないものがある。

自分と氏とはかなり永い間の交際であるが、出身校が違つるので、別に師弟の間がらでも何でもなく、ただの同学の友として、いろんな場合に、いろんな議論をした。従つて、東京在の人々が直接に知らない氏の逸話は、自分はたくさん知つている。一日、氏と自分は“学閥”の功罪について大いに論じ合つたことがあつた。その時氏は学閥を肯定するが如き口吻こうぶんをもらしたので、私ははなはだしくそれを詰なじつたことがあつた。博士は、また未だ壮年の頃、“数学公式を忘れて困る”といつて、研究の樂屋話をもらされたこともあつた。しかし、晩年の頃、改暦問題でよほど氏は調子に乗つていたらしい所へ、私は鋭くその急所を突いたので、すこぶる狼狽したものと見え、(それに、老人性の短気も手伝つて)最近にはきわめて興奮した論調をもって返事をよこしておられ、殊に、自分が“暦は全世界劃一的のものでなければならぬ”という常論をもち出すものだから、氏はよほど窮したと見えて“暦界は百花爛漫の盛観が現われてもよいではないか?”という返答をよこされたが、これなどは、氏の論の弱点を“語るに落ちた”ものである、といふべきである。

とにかく一徹な性格から、相手の老若をも顧みず氏は、議論を吹きかけられた。また、氏は決して冷静といわるべき人でなく、時にはすこぶる感情的な性格を表わされた。かの一戸直蔵いちのへななおぞう博士が死なれた時、平山氏

が天文月報誌上に書かれた一文を読むと、如何に氏が死した論敵に対して冷酷であるかが明瞭である。こういう性格の人は、学者として人は許すかも知れないが、人として、また教育者として、また、指導者として尊敬されない。氏の如き人は、官学者としてよりも在野の学者であった方が、もっと大きく学界のために貢献したであろう。

- 『四十八人の天文学家』（一九五九年六月号、恒星社厚生閣）所収。
- 収録にあたり旧字は新字に、旧かなは新かなに改めたが、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- カタカナ書きの人名・地名については、通行の表記にあらためた。
- 「」は編者の註である。
- PDF化にはL<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X<sub>2 $\epsilon$</sub> でタイプセッティングを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、  
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。